

奈良県議会議長 上田 悟 様

観光振興対策特別委員会
調 査 報 告 書

平成 2 5 年 7 月 5 日

観光振興対策特別委員会

目 次

I 調査事件	1
II 調査の経過	1
III 調査の結果	1
1 奈良県の取組状況	1
基本戦略1 ”巡る奈良”をテーマにした周遊型観光地	2
基本戦略2 オフシーズンを解消した通年型観光地	3
基本戦略3 奥深い奈良の魅力の効果的な発信	3
2 有識者からの意見聴取	4
3 県内の取組状況	5
(1) 東大寺総合文化センター	5
(2) 奈良国立博物館	6
(3) 石上神宮	6
(4) 多神社	7
(5) かしはらナビプラザ	7
(6) JAならけんファーマーズマーケット「まほろばキッチン」	8
4 提言等	8
(1) 周遊型観光の推進について	8
(2) 奈良公園周辺の整備について	9
(3) 記紀・万葉プロジェクトの推進について	10
(4) 観光情報の発信について	10
(5) 国際交流の促進について	11
5 おわりに	11
観光振興対策特別委員会調査経過	12
観光振興対策特別委員会名簿	14

I 調査事件

- 1 所管事項 観光の振興に関すること
- 2 調査並びに審査事務 ポスト1300年祭の観光振興に関すること

II 調査の経過

平成22(2010)年は、奈良・平城京に都が移って1300年を迎えることから、平城遷都1300年祭として、平城宮跡会場を「メイン会場」とするほか、「巡る奈良」をテーマに県内各地で特別イベントや特別開帳が行われた。来場者は約1,740万人。そのうち、4月24日～11月7日に開催された平城宮跡会場の来場者は約363万人。「巡る奈良」をテーマに県内各所で行われたイベントの来場者は1,380万人と、その経済効果は約967億円であった。

本委員会は、平城遷都1300年祭に続く観光振興が、県土発展の必須であり、雇用創出、定住人口の増大、世界遺産をはじめとする歴史文化資源や豊かな自然資源を保存・活用を図るため、ポスト1300年祭の観光振興について調査することを目的として、平成23年5月20日に設置された。以来、14回にわたり委員会を開催し、関係部局からの説明を聴取するとともに、県内における取り組みなどの調査を行った。

III 調査の結果

1 奈良県の取組状況

奈良県では、平成22年4月、「奈良の未来を創る」をテーマに、奈良をすこしでもよくしたいという願いをまとめた「5つの構想案」を公表された。その中に「(仮称)ポスト1300年祭構想」がある。

この構想の具現化に向けて、「巡る奈良」をテーマに周遊型観光地としての魅力を高めること、また、オフシーズンを解消し、通年型観光地をめざすこと、そして、奈良の奥深い魅力を効果的に発信することの3つの基本戦略により、平城遷都1300年祭で得た貴重な経験や蓄えた力を発揮し、奈良のさらなる観光振興に向けた多様な取

組を進めており、本委員会では下記の内容について調査を行った。

戦略1 “巡る奈良”をテーマに周遊型観光地としての魅力を高めます。

- ・ 奈良公園およびその周辺の整備
- ・ 平城宮跡歴史公園の整備の促進
- ・ 平城遷都1300年祭の事業の継承
- ・ 良質ホテルの誘致とホテルを核とする賑わいと交流の拠点整備
- ・ 宿泊力の強化
- ・ 中南和の魅力振興
- ・ 明日香をはじめとする奈良全体の歴史展示の推進
- ・ 食の魅力化
- ・ 奈良の魅力を一層高める交通環境の充実
- ・ 自転車を活用した取り組みの推進
- ・ 河川を利用した周遊促進への取り組み
- ・ まちをきれいにする取り組みの推進
- ・ 「奈良の贈り物」(土産物)の開発
- ・ 修学旅行の誘致促進

<主な事業の内容>

- ・ 奈良公園およびその周辺の整備において、奈良公園基本戦略を策定し、奈良公園施設整備魅力向上事業では、奈良公園における課題や来訪者ニーズに対応するための整備を行っている。
- ・ 平城宮跡歴史公園の整備の促進において、平城宮跡周辺魅力向上事業では、平城宮跡の利活用の推進を図るため、トイレ及び駐車場等の管理運営、用地取得及び公園整備検討等を行っている。
- ・ 平城遷都1300年祭の事業の継承において、平城宮跡内イベント展開事業では、平城宮跡でのにぎわいを創出するため、魅力あるイベントを開催するとともに、巡る奈良推進事業では、奈良を巡る施策の推進と地域イベントの支援を図っている。
- ・ 良質ホテルの誘致とホテルを核とする賑わいと交流の拠点整備並びに宿泊力の強化において、ならの宿泊力強化事業では、「ホテルを核とする賑わいと交流の拠点整備」等を推進するとともに、おもてなし産業強化資金により、宿泊施設の整備充実を図っている。
- ・ 食の魅力化において、奈良フードフェスティバル開催事業では、奈良の食の魅力を高め、県産食材の活用や食のネットワークの拡充を推進するとともに、眺望のいいレストラン支援事業では、県産農産物を活用した奈良の美味しい食とすばらしい眺望を楽しめる飲食店の認定及び支援を行っている。

- ・奈良の魅力を一層高める交通環境の充実において、奈良中心市街地の交通対策事業では、奈良公園から平城宮跡、西の京を含むエリアにおける交通渋滞対策の実施及び周遊観光の促進を図っている。
- ・自転車を活用した取り組みの推進において、自転車利用促進事業では、「奈良県自転車利用促進計画」に基づく自転車利用ネットワークの構築や自転車利用環境の充実を図っている。

戦略2 オフシーズンを解消し、通年型観光地を目指します。

- ・ 官民連携による国際会議等の誘致推進
- ・ 「光と灯り」を活用した賑わいの創出
～オフシーズン魅力対策イベントの実施～
- ・ 奈良公園を核とした観光・誘客・宿泊の促進
- ・ スポーツイベントを活用した誘客の促進
- ・ オフシーズンにおける誘致促進

<主な事業の内容>

- ・官民連携による国際会議等の誘致推進において、「奈良県国際会議・国内会議誘致推進本部」を立ち上げ、会議施設や宿泊施設、交通事業者などと連携し、誘致活動を進めている。また、奈良県ビジターズビューロー活動支援事業では、コンベンション誘致のプロモーション活動、奈良県でのコンベンション開催への支援を行っている。
- ・「光と灯り」を活用した賑わいの創出において、奈良公園光とあかりのイベント事業では、冬花火の祭典、しあわせ回廊なら瑠璃絵を実施するとともに、なら燈花会事業を行っている。
- ・奈良公園を核とした観光・誘客・宿泊の促進において、奈良公園オフシーズン活用事業では、奈良公園を核としたにぎわいを創出するイベントを開催している。
- ・スポーツイベントを活用した誘客の促進において、オフシーズンのスポーツイベントを活用した奈良の宿泊推進事業では、全国高校ラグビー大会を活用し、県内への宿泊客の誘致を図るとともに、奈良マラソン開催支援事業を行っている。

戦略3 奥深い奈良の魅力を効果的に発信します。

- ・ 記紀・万葉プロジェクトによる誘客促進
- ・ 首都圏からの誘客の促進
- ・ 官民一体となった外国人観光客の誘致
- ・ 多彩なツールを利用した情報発信

- ・ 中南和・東部地域の観光情報発信機能強化
- ・ 県内の魅力あるルートを紹介する「歩く・なら」の推進やドライブ観光の推進
- ・ 社寺の魅力の情報発信の推進
- ・ 自転車を活用した取り組みの推進（再掲）

<主な事業の内容>

- ・ 記紀・万葉プロジェクトによる誘客促進において、「記紀・万葉プロジェクト」検討委員会運営事業では、古事記、日本書紀、万葉集や地域に伝わる伝承を活用した各種事業の展開の検討をするとともに、奈良「記紀・万葉集」名所図会制作事業では、記紀・万葉集に記載された本県の見所を紹介するパンフレットの作成、及び「記紀・万葉でたどる奈良」紹介事業では、ウェブサイト「記紀・万葉でたどる奈良」で紹介しているウォークルートのパネルを作成している。
- ・ 首都圏からの誘客の促進において、「記紀・万葉」シンポジウム開催事業では、県内の機運醸成及びゆかりの地である他県との連携を図るシンポジウム等を県内及び首都圏で開催している。
- ・ 官民一体となった外国人観光客の誘致については、中国陝西省・韓国忠清南道との友好提携協定書に基づく交流推進を図るとともに、外国人観光客誘致戦略ビジットならキャンペーンでは、近畿府県、民間団体と連携し、東アジア、欧州等を対象に国のビジット・ジャパン地方連携事業を活用した効果的・効率的な観光客誘致を展開している。
- ・ 多彩なツールを利用した情報発信において、奈良の旬の観光情報発信事業ではJR名古屋駅及び阪神三宮駅で奈良の旬の観光情報を電子ディスプレイにより発信するとともに、大型ディスプレイによる観光情報発信事業では、県内の主要駅及び集客施設等4か所に大型ディスプレイを設置し、県内各地のタイムリーな観光情報を提供している。

2 有識者からの意見聴取

一般財団法人奈良県ビジターズビューローの専務理事から奈良観光の特性と課題等についての意見聴取によると、次のとおりとなる。

奈良県観光の特性において、奈良県に来られる観光客は年間約3,500万人で推移している。宿泊者数は平成15年以降、年間、概ね3,500万人中250万～320万人である。

京都府は約7,600万人の観光客が来て、宿泊者数が1,479万人であり、京都府の宿泊率は約19.3%ということになる。これに対して奈良県は宿泊率が

7%から9%で、京都府は宿泊者数の歩どまりが大変高い状況にある。

奈良県への宿泊来訪者は、40%以上が関東地区から来られている。また、修学旅行による宿泊者数は、約22万人で、1人当たりの平均の宿泊日数が1日から1.4日と、かなりの学校が京都とセットで来ている。例えば、中学生で2泊3日の修学旅行であれば1泊が京都でもう1泊は奈良ということになる。

有望市場における人気度では、意外と子育て後の夫婦とか友達同士ということで、一番は大人、もしくは熟年、シルバー世代の方たちが、奈良にとってはこれからのマーケットになる。

高額消費の可能性では、連泊される方が意外と多い。それはご親戚の家とか、ドミトリーのようなところに泊まっていることも数としては少なくないが、連泊される方へのアプローチが、今後これからのテーマかもわからない。

コンベンションによる効果では、奈良のコンベンション、国際会議などは47都道府県の間で15番目で、年間25～26件ある。これは非常にいい展開だと思う。理由は、奈良公園を中心として世界遺産と合わせたコンベンション行くと、奈良らしいユニークベニューとなるからである。

滞在型の観光への課題では、京都、大阪等の近郊から見た奈良として、日帰り圏内で、泊まろうという感覚が少ない。奈良でゆっくり滞在するというイメージがやはり低い。特に夜などは、商店などが早くしまってしまうということがある。

来訪の動機づけとして、絶対に外せないポイントは、観光地と温泉。意外とショッピング、食事・グルメなどもポイントが高い。もちろん文化遺産であるとか、自然というのも奈良にはすばらしいものがあるが、素材を生かし切れていないのではないか。

宿泊施設についても、施設が少なく、これからの課題である。食の魅力も特徴のある味覚が少ないイメージがある。そんな中で、ミシュランガイド2011とか、伝統の奈良野菜であるとか、クークルなど、すばらしい素材、ポイントもできているので、これらをどう活用させていくかがポイントだと思う。

二次交通については、本当に少ない。観光地、観光スポットが散在しているので、これらをどう効率的に結んでいくかが課題となる。

3 県内の取組状況

(1) 東大寺総合文化センター

(調査目的：新たな観光の拠点施設について)

かつてここには東大寺学園があり、移転後の跡地活用として将来の東大寺の意義を発信していく基地となる(仮称)東大寺布教センターの設置を予定していた。今

般、東大寺学園の移転に伴い、念願の東大寺総合文化センターが誕生した。

東大寺総合文化センターは、大仏殿と南大門の真ん中に位置し、地下1階、地上3階の建物で、この中に図書館、東大寺史研究所、金鐘ホール、小ホールと会議室などを完備している。特に、1階の金鐘ホールは321席、350インチの大型スクリーンを設置しており、講演、講話、学術会議、音楽会、映画会などに活用できるようになっている。

東大寺は、たくさんの国宝、重要文化財を保有しているが、それを一般公開する施設がなかったため、今回ミュージアムが併設された。また、単に宝物を並べる宝物館ではなく、大仏をはじめ、なぜ現在まで傳承されてきたのかを丁寧に説明するための工夫がなされている。例えば、一般の美術館等であれば開館時間は午前9時から午後5時までだが、本ミュージアムの場合は、時間外特別観覧として、修学旅行などの団体での申し込みがあれば積極的に受け入れ、解説も行う。また、少人数の場合は、小ホールや金鐘ホールなどで映像を交えながら説明を行うなど、京都や大阪で泊まって日帰りで帰ってしまうことなく、奈良で泊まっていただく機会づくりに取り組まれている。

(2) 奈良国立博物館

(調査目的：奈良への誘客力の高い施設について)

奈良国立博物館は、正倉院展をはじめ、年に3回又は4回の特別展の開催や、定期的で開催する仏教美術等に関するサンデートーク、特別展等に際してのシンポジウム及び公開講座や夏季講座を開催している。

また、支援団体等との連携により施設を活用したイベント等の実施による博物館支援の輪を広げる取り組み、さらに地域連携として、地元の自治体・商工団体・観光団体等と連携した広報活動の展開や、東大寺、春日大社などの寄託社寺及び賛助会員企業と連携し、特別展等の割引特典付きチラシの配布など、地元商店街、ホテル、旅館等と協同事業を実施している。

さらに、奈良県立美術館、入江泰吉記念奈良市写真美術館と奈良トライアングルミュージアムズを結成し、3館協力して集客に努めている。

(3) 石上神宮

(調査目的：記紀・万葉ゆかりの地について)

石上神宮は、昭和42年歴史的風土石上神宮特別保存地区に、また平成7年石上神宮社叢が奈良県指定天然記念物に指定されている。日本最古の神社の一つで、拝殿は現存する拝殿では日本最古のもので国宝に指定されている。

石上神宮は、古事記、日本書紀など沢山の文献に記述があるなど、歴史的に非常

にスタンスの長い時間を感じることができるところである。近頃は、刹那主義のような、消耗的に時間を過ごしているところがあるが、その反面、生命力、生きるものに与えられた神秘の力について、学びたいとか、感じたい方々やパワースポットを求めて来る方々が増えている。

また、平城遷都1300年祭では、秘宝・秘仏特別展を開催され、20日間で延べ2,700人の方が来られた。

(4) 多神社

(調査目的：記紀・万葉ゆかりの地について)

多神社は、三輪山(東)と二上山(西)を結ぶ線、畝傍山(南)と平城京(北)を結ぶ線が交わる所にあり、ほぼ奈良盆地の中央に位置している。

また、三輪山、多神社、二上山は、ほぼ一直線上にあつて、春・秋分時に山頂からの日の出・日の入を拝する特別な位置にあり祭祀の理想郷であったと思われる。同神社は、弥生時代の環濠集落遺跡であることがわかっており、周りからは、古墳時代初期の祭祀土器が多数出土している。

古事記は、天武天皇が「帝皇日継」、「先代旧辞」の誦習を舎人の稗田阿礼に命じた。元明天皇は、その筆録を太安万侶に命じ、和銅5年(712年)に献上された。

古事記の編纂者である太安万侶は、この辺りを本貫地とする豪族多氏の一族である。一説では、太安万侶非実在説もあったが、昭和54年に遺骨とともに墓誌が発見され、実在したことが証明された。

境内に記念碑が建てられており、記念碑には、「古事記献上千三百年記念 太安萬侶卿」の文字と、安万侶が執筆したとされる古事記の序文の一部も刻まれている。

(5) かしはらナビプラザ

(調査目的：県中南和地域の観光情報発信拠点施設について)

近鉄大和八木駅は、大阪・京都・名古屋の各都市と直結しており、その利点を生かして中南和地域の観光情報の発信拠点として、また、今日的な課題である子育て支援、男女共同参画、市民相談などの機能を併せ持つ複合施設としてかしはらナビプラザが設置された。

吹き抜けの館内に、橿原市の歴史絵巻や四季折々の名所の展示、また、藤原京大極院の朱塗りの柱、中南和地域の観光ビデオの上映、パソコンを用いた観光紹介など中南和エリアの観光情報を幅広く紹介している。さらに、イベントスペースでは、週替わりで様々な催しやミニ講演会が開催され、紀伊半島復興企画として、川上村、上北山村、五條市、黒滝村、天川村による観光のパネル展が順次行われた。

物販コーナーでは、土産物として、奈良県内で生産・加工された商品、食品、工

芸品などが販売されている。

(6) JAならけんファーマーズマーケット「まほろばキッチン」

(調査目的：滞在型観光を促進する観光情報の発信について)

まほろばキッチンは、「食・農・観」を基本コンセプトとし、全国最大級規模の大型農産物直売所を中心とした産直レストランや観光案内所等の総合施設である。

「まほろばキッチン」の外観は、藤原京の地に相応しい、宮殿建築を想わせる黒い屋根に朱い柱の建物とし、大和三山をモチーフにした屋根により「食・農・観」の各施設を配置し、全国に類を見ない総合施設となっている。(平成25年4月オープン)

観光案内所については、交通利便のよい、橿原市の幹線道路沿いに位置していること、古代の官道である中ツ道と横大路が交わる地点の近くに位置していること、さらに本県の持つ歴史資源の奥深さを物語るのに最適な非常に恵まれた立地を生かし、3つの機能を持っている。まず、1つは、中南和に特化した観光情報を案内所に集約し、発信する、中南和全体の情報発信拠点としての機能。2つ目は、中南和の観光スポットに精通した観光コンシェルジュが、笑顔と郷土愛を込めてお客様のニーズに応じた情報を提供。3つ目に、歴史豊かな立地を生かした展開として、日本書紀にスポットを当て、歴史を味わう中南和の観光の魅力を紹介する観光案内などの特色をもたせるなど、道路交通の利便性のよい立地を生かした滞在型観光を促進できる観光振興の拠点を目指している。

4 提言等

本委員会では、付議事件「ポスト1300年祭の観光振興に関することについて」を「周遊型観光の推進」「奈良公園周辺の整備」「記紀・万葉プロジェクトの推進」「観光情報の発信」「国際交流の促進」の視点から調査検討してきた。

県の人口が年々減少している中で、観光振興は、地域活性化の有効な手段となるものであることから、世界遺産をはじめとする歴史文化資源や豊かな自然資源を保存、活用するとともに、平城遷都1300年祭で培った地域住民等や県内各地の神社仏閣などとの連携の輪を発展させるなど、本県が有する多くの魅力を最大限活用したポスト1300年祭の観光振興に関することについて、次のとおりまとめ、提言を行う。

(1) 周遊型観光の推進について

本県の人口は、平成11年をピークに穏やかな減少傾向が続き、地域の経済活力

の低下を招いている。特に、県南部及び東部地域における過疎化、高齢化による地域の経済活力の低下が著しい状況にある。

今後の地域活力を維持し、高めていくためには、人に来てもらうことが必要となり、いわゆる定住人口の減少を交流人口の増加で補う必要がある。

この交流人口の増加は観光振興の中から生まれてくるものであり、例えば、成功をおさめた平城遷都1300年祭のようなイベントの開催、東アジア地方政府会合の継続的開催、国連世界観光機関(UNWTO)アジア太平洋センターと連携した国際会議などの積極的な誘致により、交流人口の増加を図る必要がある。

県発表による平成23年一年間の観光客は前年より25%減の3,331万人と平成22年に開催された平城遷都1300年祭の反動や、3月の東日本大震災、9月の紀伊半島大水害の影響も受け、大きく減少した。また、このうち約9割が日帰り客であり、宿泊客は約243万人と前年より24.4%減少している。いわゆる奈良の観光は通過型観光が多く、交流人口増加のためには、滞在型周遊観光客を増加させなければ、真の観光振興にはならない。

観光立県として、滞在型周遊観光に向けて、宿泊施設の充実や散在する観光地を効率的につなぐ交通アクセスの整備に努める必要がある。

(2) 奈良公園周辺の整備について

奈良の観光は、奈良公園を中心に、文化財、神社、仏閣、歴史的景観などを観光資源にして発展してきている。そして、奈良公園のもつ自然資源、歴史・文化資源、公園資源、並びにこれら各資源が融合した独自の風致景観の魅力を守っていくことが非常に求められている。

奈良公園は、明治13年に開設され、その後の整備や拡張を繰り返し現在に至っており、奈良市街地に隣接するとともに、世界遺産「古都奈良の文化財」である東大寺、興福寺や春日大社などの社寺、そして春日山原始林と一体のものである。

奈良公園の持つ価値として、我が国でも有数の都市と自然が共生する場所であり、春日山原始林、奈良のシカなど9件の天然記念物を有し、豊かな自然環境を核として高密度に集積している。

また、東大寺、興福寺、春日大社をはじめ、8世紀から連綿と続く歴史を有する神社仏閣等の文化財も高密度に集積し、かつ、現代に受け継がれる伝統的な行催事の場であるなど、古都の歴史・文化を今に伝える重要な役割を果たしている。

さらに、これまでの施設の整備、改良等により各所に公園の資源が集積しているとともに、大きく育った松、桜等の植栽樹木が周辺施設と相まって、美しい風致景観を創出している。

したがって、奈良公園周辺の整備において、奈良公園における自然資源、歴史・文化資源、公園資源、並びにこれら各資源が融合した独自の風致景観の価値を踏ま

えた利活用を検討する必要がある。

(3) 記紀・万葉プロジェクトの推進について

記紀・万葉プロジェクトは、『古事記』完成1300年にあたる平成24（2012）年から『日本書紀』完成1300年の平成32（2020）年をつなぐ9年間にわたり、『古事記』『日本書紀』が編纂され、数多くの万葉歌が詠まれた地・奈良県において、「記紀・万葉集」をはじめ、そのほか連綿と受けつがれてきた様々な文献、地域の伝承などを含む豊かな歴史素材を活用し、現代と古代、古代と未来、そして、ひとりひとりが楽しみながら、歴史とのつながりを実感する「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」の実現を目指して取り組まれており、各市町村や観光振興に関わる民間団体、NPOあるいは社団法人等、また個人で観光振興に協力をされている方々に対して、情報発信を行い、記紀・万葉プロジェクトの盛り上げを図る必要がある。

また、記紀・万葉にかかわるビューポイントの地域は、もっともきれいに景観を大切にしなければならない。例えば、万葉歌碑の足下を見れば草が生えていることのないよう、景観行政団体と連携しながら景観を大切にしていくとともに、記紀・万葉プロジェクト事業にかかわる伝承あるいは史跡の情報発信や、ハード整備を含む観光環境の整備に努める必要がある。

さらに、観光立県としては、どのような姿になっているのかを示す基本戦略をつくる必要がある。記紀・万葉に加えて、古代史、例えば邪馬台国の問題など、さまざまなおもしろいテーマがたくさんある。そういうものも掘り起こしながら、日本の歴史のふるさと、奈良へ行けば歴史のすべてがわかる、始まりがわかるというイメージを、日本全国に定着させなければいけない。そういう意味で、記紀・万葉に漏れるようなものも、それはそれで外縁、周辺の関係という形で整理をし、豊かなものにしていく必要がある。

(4) 観光情報の発信について

観光情報の発信においては、地元の人にしかわからない、行政の人にしかわからないような情報の発信ではなく、観光地の状況を的確にわかりやすく提供する必要がある。また、的確にわかりやすい情報を提供することは、風評被害対策にも効果がある。

また、観光客に県内各地を巡ってもらうことが県の観光案内事業の1つの大きな柱であり、あまり知られていない観光資源など、県内の情報をくまなく発信することにより、県内各地に観光客を誘導していく必要がある。それには、観光資源の魅力を現地で案内・発信する観光ガイドの知識や、案内技術のスキルアップも必要で

あり、現地に習熟するとともに系統的・継続的な研修を行う必要がある。

さらに奈良マラソンなどスポーツイベントなどのテレビ放映を活用して、奈良の観光地や風景等を紹介するなど、メディアを活用した情報発信をする必要がある。

(5) 国際交流の促進について

歴史的、文化的にも関係の深い中国陝西省や韓国忠清南道と友好提携協定が締結され、同協定書による伝統芸能や音楽、スポーツ等を通しての友好交流が本格的に行われる。中国や韓国といった東アジア諸国との友好関係を築く上での大切な要素として、東アジア各地域の歴史と文化にはぐくまれた多様性を尊重しつつ、相互の理解に基づく交流が必要である。今後、友好交流において、多くの分野における交流の中でも、特に1300年にわたり継承し、発展させてきた奈良県の歴史と文化を通じた観光の視点で促進する必要がある。

また、国際化の時代ということで、なら・シルクロード博記念国際交流財団が行っていた県内在住の外国人や留学生等のために多言語による相談や情報提供などの支援事業を引き続き、観光振興の一つと位置づけて、取り組む必要がある。

5 おわりに

本委員会に付託された事件は、県の政策課題の一つである経済の活性化に位置づけられおり、重要かつ広範囲にわたるものであるが、本委員会の設置目的であるポスト1300年祭の観光振興を目指して、県内の事例調査を含む調査活動に取り組むなど、活発な調査を進めてきた。

県では、記紀・万葉プロジェクトの着実な推進、国連世界観光機関（UNWTO）アジア太平洋センターと連携し、国際会議等の積極的な誘致を行っている。また、平成25年度は新たに「地域資源を活用した観光基盤の整備とにぎわいづくりの推進」を掲げられ、奈良公園を「世界に誇れる公園」とするとともに、平城宮跡歴史公園の整備を促進し、特別史跡平城宮跡の一層の保存活用に取り組むこととしている。

本県のポスト1300年祭の観光振興にあたっては、新しい魅力づくりを進め、ゆっくりじっくりと楽しめる観光県を目指すとともに、観光が地域の活性化につながるよう、歴史文化資源や豊かな自然資源を活用した観光施策の推進が強く求められる。

以上により、本委員会の調査は終結するが、ポスト1300年祭の観光振興については、県の役割をしっかりと認識し、リーダーシップを発揮するとともに、地域において観光振興に意欲を持つ人たちが、地域の観光資源を生かしながら、創意工夫を凝らした地域ならではの観光振興に取り組むことができるよう、それぞれの地域において観光振興に取り組む民間中心の組織の育成と活動への支援を行うなど、ポスト1300年祭の観光振興に努められたいことを要請し、本委員会の報告とする。